

# 佑 啓

社会福祉法人佑啓会 ぶる里学会  
〒290-02 市原市今富 1110-1  
☎0436-36-7611  
発行所 里見 吉英  
編集者 三 股 金 利

## 訪問者

里見 吉英

「もしもし、ぶる里学会ですか。〇の兄ですが施設長さんお話しします。」

「はい、私ですが」  
「いつも弟がお世話になっています。一度ごあいさつに伺おうと思ひながら今になってしまいまし

た。」  
「言葉は非常に丁寧でも声は非常に若々しい。」

電話を受けた時はいくつになるお兄さんだったかなと、改めて〇君の資料を調べてみるとまだ二十歳になったばかり。永くこの仕事をしていた、その年代の兄弟の方が単独で施設に足を運ぶというのは、私も初めての経験でしたので、教目後わざわざ手土産をさげ学合に見えた時は、何と声をかけたらいいのか私の方がまごついてしまった。

「いつも弟がお世話になっております。私もようやく大学も決まり、落ち着いたのでごあいさつに伺いました。」  
まだあどけなさを残る顔でどうもしつかりと挨拶されると、またまた何て声をかけていいのやらちよつとこちらが照れ臭くなつてしまった。私がその年代であった頃を振り返ると自分のことだけで一杯で、親のこと、兄弟のことを考えるより先に、家族が自分のことを考えてくれるという立場にあったように思う。

保護者と話をする時、必ずといっていい程、生まれてからの苦労話が多くなる。親は成人してから

障害児に出会う。しかし、兄弟は生まれた時から障害児に出会い、障害児と向き合ひながら成長する。この違いは、天と地ほどの差があるだろう。それは障害者の絶対数が世の中でごく少数派であるため、自然と一般家庭とは違った生活環境に置かれてしまう。それも宿命と一口で片付けてしまふにはあまりにも望しい気持ちにさせる。

親と障害者、兄弟と障害者、同じ家族であつても与えられた人生には大きな違いがあるだろう。保護者の大半の方は障害を持つて生まれた子供に心血を注ぎ、その兄弟の成長にはあまり目を向けなかったと語られる。好きでそうしたわけでもないのだが、結果としてそうなつてしまつたということだろう。子を思う気持ちに隔たりなどあるはずがない。

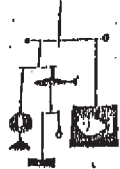
障害者と呼ばれる人達には必ず保護者という立場の人を世間には要求する。親亡き後は兄弟がその代わりにするのだから前という風潮はまだまだ根強い。知的障害者のノーマライゼーションを口にする時、では兄弟のノーマライゼーションはどうなのか。親は親の関わりがあり、兄弟は兄弟としての関わりがあると申すのだが、世の中そんなに甘くない。

私の年齢、置かれた立場は親と兄弟のちよつと中間層に位置している。(最近では限りなく親の年齢層に近づいてはいるが)結論の出来ない話になつてしまつたが、他人である我々がとやかく言ふことではないのは百も承知であるが、親は親の人生があり、子は子の人生がある。子は所詮、親の替わりなど努まるはずもなく、またそれを押しつけるべきでもない。親の関わり、兄弟の関わりと

は次元が違ふにしろ、我々職員と寮生との関わりを含めて双方の関わり方を再度考えてみたい。  
〇君のお兄さんが卒業な学生生活を送られることを祈つて。  
兄弟バンザイ!  
(施設長)

## 余談

最近よく読者の方から、Kさんはその後どうしていますかという質問をされます。Kさんのシリ、ズは大変好評だったようです。Kさんはこの「佑啓」を発行する度に出奔し、最後は元の生活(上野界隈)に戻つてしまひました。我々には理解しがたい自由と喜びがあるようです。



## アトリエ

三股 金利

十一月の北欧視察から早五カ月が過ぎた。今回はベルギーの報告であるのだが、時間のフィルタは記憶をおぼろげにしてしまふ。タイミングよく、愛読の三月号誌面に視察団団長の木内先生が報告された。読みながら再び鮮明になつていく残像とともに、もう一度旅をしたいという欲求が頭をもたげた。職場と家とを拠点とした構内軌道から・・・  
ベルギーでは、日本という育成会の本部、そして居住施設・通所施設・高齢者のグループホーム・福祉工場を訪問。

育成会では本部に心理学者や性教育のスタッフを揃え、施設から相談を受けるなど我が国とは異なる点も伺つた。高齢者のグループホームは閑静な住宅街にあり、街並みに同化していた。ペンションのような規模であるが、奇抜さはなく、室内も落ち着きのあるホールの一室でいわゆる老人ホームと対比してしまつた。

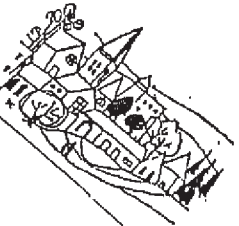
福祉工場では昼食を御馳走になつたが、ワインが出されていたのは驚かされた。アルコールを飲んだの視察など失礼なと言われそうであるが、礼を失することがなければ構わないとの話。飲んでいようがいまいがその人の責任ということなのである。早速おいしく

いただいた。「無礼講」の宴会が好きなのとほさすがに違ふと感心したもの、夜、街に出ると酔っぱらいは居るもので、ちよつと安心した。

ところで、通所の施設での作業部門のことや、グループホームの作業室のことをアトリエと呼んでいた。このアトリエという言葉に何か引かれた。作業所とアトリエ、むこうでは「作業所」と同様の感覚で使われているのかもしれないが、創作活動の場の雰囲気は伝わるようなイメージの言葉は周りの人には心地好い。木工や陶芸など内容はほとんど変わらないのに。

私は今まで作業指導という場を担当してきた期間が長かつた。皆で作業(労働)するあの快汗は忘れない。昨今、この指導・訓練に對しての批判・反省も聞かれ人権の尊重が謳われる。指導から援助へ。結構なことだと思ふ。しかし否定されるほど過去は過ぎたであつたのだろうか。  
話を戻そう。アトリエである。この雰囲気の良い言葉に心利まされたことは、自分自身気付かなかつた作業の印象を改めて俯瞰的に見た結果なのかもしれない。あるとき、入所者の義父が作業のことを苦役と呼んだ。こわもてのその筋の人ではあつたが、私は少なからずショックを受けた。「もしかしたら端から見ればそのように感じるのかも知れない。」施設は何をするところなのか、一般社会からは理解しがたい場所なのである。  
アトリエ。個人の主体的な動きが見えそうな言葉。精神薄弱から知的障害へ呼称が変わつたことによる効果と同様、施設で使われる言葉も言い方によつて何らかの変化をもたらすことも可能かもしれない。彼等をとりまく何気ないこと、そこからもう一度見直そう。

(指導係長)



こ　う　や　御　帰　館

木更津のロマートがつぶれた。先週帰宅時横を通ったときはまだ看板が残って、シャッターは閉まっていたのでこういって「おやすみね」といった。今日は看板におおいがなくなってあったから、つぶれたんだよと教える。「ちびまるちゃんこわいちゃんやった」「タクシちゃんこわいちゃん」とひとつひとつとついでにゆき、なくなったのを自分に納得させているようだった。

……でも、まだジャヌコにある！

恐怖のめんどくさ男の御帰館である。人間はよくしたもので、彼がふる里学舎に行っているときの我が大姉は、彼がいるときのめんどくさな生活を楽しみ、彼の良いところ、かわいいたころばかりを話しながら暮らしている。ふる里学舎へ行った次の日から、もうこうやみ私達にとってたまらなくかわいい存在になっている・・・で、彼が帰ってくると、わあー！そうかあ！こんな大変な奴だったんだー！とショックの受けなおしをやっているわけである。今回ももちろんそうである。毎週そうである。こたわりはもはや書ききればいほどにふえていく。一つのこたわりがふと気がついてみると想像を絶する方向へエスカレートしている。ひとつ止めたなら次に何が始まるのか。

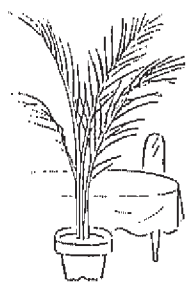
が、これもこの世のことである。すべてはこの世で終わるし、この世で戦死は合うことになっている。こうやのことも、どんなに私達が大量でも、将来かならず来てくれる死がやすらぎをくれる。だったら私ら息のあるうちはこうやひとすじでよいではないか。

親の方はきちんと計算ができていたのだけれど、さて、こうやクンはこれからいくつ人生の節目をむかえ、いくつよろこびいくつ泣くのか。出来たら泣いてほしくはないのだが……

日中しきりに「ただいまの非常ベルは・・・」といていた。いたずらはやめられないらしく親としてほんとうにもうしわけなく思っています。

夜12時までねばり、カレンダーの日付をかえ、新聞をていねいにしまって就寝。寝顔はとてかわいく、これを見せてくれるのがこうやの親孝行なのだなとつくづく思った。いいのさ。それで充分さ。

山田雄一の父



先生「と喚ぶ声は、私が新人職員の時と一緒に農作業に従事したＡさんです。懐かしきととも、以前にもまして逞しさがそこに目撃されます。」

彼とは、袖ヶ浦蒲田センター在職七年間のうち四年間の歳月を一緒に過ごしました。歳も同じで何となく気の合う彼には、仕事で失敗した時、「がんばれや」と言わんばかりの笑顔に大分助けられました。そんなＡさんが四月より通所に籍を置くことになりました。

彼は、二十年近くの施設での生活に終止符をうち、再び家族とともに暮らすはじめました。これは家族にとって、相当の不安があったことと思います。実際、学舎までの送迎やら身の回りの世話等、目に見える負担だけでもかなりのものがある訳です。

そんなことはどぶく風、彼は毎日元氣良く通つてきます。施設という制限を感じさせない雰囲気を感じ出し、不安を感じない同じ通所



星を離れでくる利用客や、本妻は人所願説を希望しているが、現状が許さず通所部までの送迎にハンドルを握り続けるお母さん達など、いる人が様々な想いをこめて通つてきている。この想いを全て受け止めるにはまだまだ力不足を感じますが、勇気を出して新たな一歩を踏み出したAさん一家をはじめ、縁あって私どもと関わりを持つことになつた方々が、ここを利川して良かったと思えるようにできるだけのことはしたいと思ひます。

住宅福祉の一助を微力ながら、さらに担えるよう四月より定員を十五名から二十二名に増員しました。

二十六日、着々と工事が進められていた施設の前を通る館山自動車道が開通しました。春風の中、走りゆく車の行く先々に無限の広がりを感じます。

通所部の増員に伴つて、新たに採用になった職員を紹介します。

フレッシュ

① 生年月日  
② 趣味  
③ 特技  
④ 抱負

① 2011年11月。

【堀金 兼太郎】 生活係  
①四十六年十一月二十三日 ②音楽観賞  
③平夕一

【東瀬戸 徹】 農耕科  
①三十八年十月二十五日 ②音楽鑑賞  
③カラオケ ④いつまでも若々しい職員で  
いる。

【附】  
①四十七年一月三十日  
②摩樂鑑賞  
③特になし  
④精一杯頑張ります。

【宮崎 理】 通所部  
 (1)四十九年三月八日 (2)半夕一演奏  
 (3)よく観ること (4)早くこの職場に慣れて  
 立派な指導員になりたいです。

【岡田 三代子】 工芸科  
 (1)四十八年八月二十日 (2)映画鑑賞 (3)ボ  
 リング (4)人所者の方が何を求めている  
 のかを常に考えられるようにして、未熟な  
 私も成長していけるよう頑張ります。

〔実松 智恵子〕 パート勤務

①②音楽鑑賞や先生等 ③ふる里学舎  
に就いて八ヶ月になりました。これから  
宜しくお願ひ致します。

【山縣 則子】 パート勤務  
①？ ②体を動かすこと③自分のこれから  
の人生、楽しくいろいろ経験し役に立てれ  
ば良いと思う。

【王藤 恵子】 パート勤務

① 気持ちちは二十代後半、体力は三十代前半  
② テニス ③ おなかの脂肪を筋肉に変える  
べく毎日体力強化を楽しみに頑張ります。

昨年（去年）の十一月より働き始めて五ヶ月が経ち、改めて正職員となりました。今まで福祉とは無縁の生活を送ってきた自分にとって、この五ヶ月間は戸惑いと驚きの毎日でした。そんな自分に先輩職員の方々は優しく色々なことを教えてくれました。その中で今でもよく論じられることが、慣れた頃が「一番危険」ということです。この言葉にいつも自分は大キツとさせられます。その原因には新人としての緊張が、甘えに委ねているところにあるのかも知れませんが、その度に気の引き締まる想いがします。

そんなことを繰り返して五ヶ月、いつになつた自然に、慣れることができるのかなどと考えたりもしますが、これも先輩方の言葉を借りると「この仕事で、これでよいということはない」という通りに、これからも初心を忘れることなく一生懸命頑張りますので、よろしくお願ひします。

結果

早いもので、三年目の春もあつた。いうまに過ぎ去り、爽やかな風が初夏を運んできました。つづく時の流れの速さを感じます。間所当時は格好の運動場だつた高連道路も今は昔の話。たくさん車が行き交っています。

